

住民の「証言的語り」からみた嘉手納米空軍基地・航空機爆音被害の意味

- 他者への呼びかけとしてのインタビュー -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
八木 宏子

本研究は、沖縄県嘉手納町の嘉手納米空軍基地の航空機による爆音被害について、被害住民の感情をインタビューによって聴くことを通して、生活者の主観的立場から被害体験の意味づけを明らかにしたものであり、同町でのフィールドワークに基づくものである。沖縄県は在日米軍専用施設面積の約75%が集中し、嘉手納町は町面積の83%を基地が占有する、「基地の島」の「基地の町」という現実がある。同町では、昼夜を問わない航空機の「爆音」により周辺住民は身体的精神的に様々な被害を受け続けている。

爆音に対する調査は被害立証の客観的見地から包括的に行われてきた。しかしながら、爆音被害は単なる音の被害ではなく、被害の意味づけや感情はひとりひとりの体験として異なるものであり、住民の生活の場の視点から被害の意味を理解することが重要である。

また、被害者による語りは、他者に対して被害を訴えかける証明的行為であり、「証言的語り」となる。そして、聴く者に証言者の世界の証人になることを求め、聴き手や読者に直接的または間接的に連帯を訴えかける。聴く者としてのインタビュアーは相手のフィールドで爆音の現実を体験しつつ証言を聴くことで、証人となりながら被害という体験の意味づけを行った。

2人のインタビュイーの語りと考察からは、個々が有する爆音被害体験の主観的な意味づけが明らかになった。爆音被害の語りの考察としては、共同体の語りという特徴や、「うるささ」,[諦め],「慣れ」という語りえない感情を含む意味が浮かび上がり、「被害」者という文脈が個人的、具体的、瞬間的、現在の次元の被害でありながら、同時に共同体の記憶も巡り、集団的、抽象的、慢性的、歴史的な次元の被害も含むことが明らかになった。また、当事者のアイデンティティは被害者であると同時に生活者であり、インタビューの場では証言者になり、聴き手に理解や連帯を呼びかける横断的な語りになされ、インタビューは、他者への呼びかけの行為や場となった。

呼びかける証言者に対して、聴く者や他者、社会の応答責任の必要性を大きな問いとし、語りの場の枠を押し広げ、心理社会的苦悩に応答する方法を模索する取り組みの一助としたい。